相生市方言

鎌田良二

はじめに

方言研究の第一段階として大切なことにその地の方言を正確に記述する記述的研究がある。

本稿は兵庫県相生市という地域におけるアクセント・音韻・文法・語彙を記述しようとするものである。

相生市は兵庫県の西南部に位置し、瀬戸内海に臨む西播磨工業地帯で古くから造船工業の盛んなところである。そのため人口は約四万であるが山陽新幹線の駅がある町である。ところが最近の造船不況で市当局も次の産業を考えているようである。

本稿の調査は昭和六十一年秋から六十二年はじめにかけて行なったものである。

また、相生市の古い方言との比較のために明治二十年頃の方言を詳しく記した高田十郎著『播州小河の方言』を記し今回のインフォーマントのそれの使用状況を調査した。

さらに、昭和二十四年の「相生方言」と、その頃の相生小学校の記述をあげておいた。

語彙のうち、動物類、植物類、道具・生活類については相生市の形と、昭和五十三年から五十六年までの四年間、甲南女子大学学生が全県調査したものの一部とをあげた。

アクセントの項は相生中学校の三人の女生徒の発音。その他はすべて相生市はえぬきのつぎの方々によるものである。

田中俯治（明治四十年生まれ）　相生市那波　本稿中、那

波方言としたものは同氏によるものである。

木下充造（大正四年生まれ）　相生市相生

金谷重廣（大正八年生まれ）　相生市相生

本稿中、相生方言と記したものは両氏によるものである。

稿末に現在の相生中学生の動態調査を記すため、赤穂中学生との比較の表をあげていくらかの解説を加えた。

一　アクセント

相生市域のアクセント体系はつぎに示すとおりである。これらは、相生中学校三名の女生徒による発音から得た型である。

○○　㈠飴　牛　風　口　竹　鼻　水　着る　振る　泣く

○|○　㈡石　橋　雪　㈢足　犬　貝　髪　米　耳　山　綿　㈣銭　㈤雨　井戸　良い　無い

○○|　㈣糸　稲　箸　書く　見る　降る

○○○|　㈠着物　桜　柳

○|○○　㈣光　袋

○|○○　㈤朝日　命　涙　眼鏡　㈥兜

○○|○　㈣頭　女　鏡　薬

○○○|　㈥兎　鼠

○|○○○　鉛筆　散髪　流れる

○○|○○　ひるめし　悲しい　正しい　詳しい

○|○○○　山々　空しい

○|○○○　大根　タンポポ　富士山

○○|○○　親指　あがるな　歩いた

○○○|○　色紙　口唇　松茸　おいしい

○○○○|　学校　かくれる

○|○○○○　田舎者　泳ぎます

○○|○○○　山間部　熱心や

○○○|○○　山桜　泣きました

○○○○|○　しあさって

○|○○○○

○|○○○○　お月様　赤かった　おめでとう　おじいさん

○○|○○○　春霞　かくれんぼ

○○○|○○　頼りない

○○○○|○　お正月

右の一覧にある㈠㈡㈢などは、アクセント研究でいう〝第一類〟〝第二類〟〝第三類〟などを表わす。

二拍語の○|○型に㈡㈢が入ることは近畿一般と同じであるが、

㊄の「雨・井戸」や、㊃の「銭」がここに入ったり、形容詞の「良い・無い」がここに入ったりしていることは、当市の特徴といえるだろう。東隣にある龍野市では「雨・井戸」は○○で、「銭」は○○である。

○○○型に入っている㊂「兜」も、神戸あたりでは○○○型に入る。

○○○○○型は、相生市としてはあると思われる型であるが、今回の調査語からは得られなかった。神戸あたりでは「白いやろ（う）」などがここに入るものである。相生市では「シロイヤロ」となる。

二　音　韻

音韻は、相生市の特徴あるもののみを記す。

ガ行鼻濁音……語頭はg音であるが、語中・語尾のガ行音は鼻濁音ŋ音になる。明治四十年生まれの田中俤治にははっきりŋ音が現われる。以下、本稿中でガギグゲゴで記したものも語中・語尾ではŋ音であると解してほしい。

クワ・グワの音……田中俤治の発音では、クワシ（菓子）、スイクワ（西瓜）、ケンクワ（喧嘩）などはっきりクワの音が現われる。

ザ・ダ・ラ行音の混乱……本稿語彙の項その他にたびたび現われたようにザ行・ダ行・ラ行音の混乱がある。デニ（銭）はzとd、リンリキシャ（人力車）はzとr、ノゾ（喉）はdとzとの混乱による交替である。

連母音と子音……eiはe:となる。ゼーキン（税金）・ケーサツ（警察）・テーネー（丁寧）

ieはe:となる。メータトーリ（見えた通り）・ケーテモタ（消えてしまった）。ただし、ヒエル（冷える）はieのままである。

ia・io・aaの間に、グライド（わたり音）jが入ることがある。ミヤイ（見合）・シヤイ（試合）・ニヨイ（臭）・バヤイ（場合）

ʃがçと交替（シとヒとの交替）・ヒチヤ（質屋）・ヒク（敷く）

mがbと交替する。サブイ（寒い）・サビシイ（淋しい）・ケブル（煙る）

sがhと交替する。ホンナラ（それなら）・アリマヘン（ありません）

seがʃeと交替する。ミシェ（店）

音節……一拍語を二拍に長音化する。これは古くからの近畿方言の特色である。ケー（毛）・テー（手）・ハー（歯・葉）・メー（目・芽）・スー（巣）

音節脱落

イの脱落　ヤラシイ（嫌らしい）

略音便　ハロテ（払うて）・オモテ（思うて）・ウトテ（歌うて）などはウ音便になるところのウの脱落と見ることもできるが、また促音便の促音の落ちたものもある。モテコイ（持って来い）・トテキタ（取って来た）

「てやる」はタルとなる。オセタロカ（教えてやろうか）

撓音化　ワカラン（わからぬ）・タンネル（尋ねる）

拗音化　フッリョル（降りおる＝「降りつつある」の意）・チャウ（違う）

音韻転倒　カダラ（躰）・トナダ（戸棚）・ツブレ（釣瓶）・これらの転倒は当市では老年層に多い。

三　文　法

文法についても相生市の特徴あるものについてしるす。ここでは前記のインフォーマントから得られたものを中心にしるす。後に掲げる相生中学校での調査結果とあわせて見ていただきたい。

動詞

県下一般に一段活用の五段活用化の傾向があるが、相生市でもこの形は一部に認められる。すなわち「見る・着る・受ける」の一段活用の未然形に打消ヘンをつけた形を、見ラヘン・着ラヘン・受ケラヘンとすることは一部の中学生に見られる程度で、大人のことばとしては少ない。しかし、中学生に見られるということは将来ふえる可能性はあるということにもなる。

未然形　打消のヘンがつづくとき、一段活用・変格活用では間にヤが入ることがある。見ヤヘン・着ヤヘン・来ヤヘンなどである。これは古くは「見はせぬ」の形であったものであろうか。ただし、ヤの入らない形と並用される。着ーヘン、着ヤヘン、（来）コーヘン・キヤヘン、勉強セーヘン・勉強シヤヘン。

また、このように、起キーヘン・落チーヘン・延ビーヘン・降リーヘン・植エーヘンと長音の形になる。

同じく打消に「来るな」をクナ、「するな」をスナと、「る」を落とす形がある。

仮定形　タラをつけて仮定条件をあらわす。読ンダラ・見タラ・受ケタラ・来タラ・シタラである。大阪弁がそうであるが

関西方言一般にいわゆる連用形・音便形の形を用いることが多い。命令形を、ハヨ書キ（早く書け）とするのと同じように仮定形も音便の、読ンダラ、書イタラの形になる。また、「置けばよいのに」は、置カエエノニ・置キャエエノニとなる。同様に、行キャエエノニ・寝リャエエノニ・取リャエエノニとなる。来タラ・シタラとともに、クリャ・スリャの形も並用する。

命令形　ハヨ書ケ（早く書け）はいかにも命令口調という感じ。ハヨ書キの形の方がいくらかていねいの感じがある。さらにていねいになればハヨ書キーナとなる。もともと命令の意があるのだからていねいと言っても敬いではない。

来イは命令口調、キーナは「来なさい」の感じになる。ハヨセー（早くしろ）に対して、ハヨシーは「早くしなさい」の感じになる。

音便形　いわゆる略音便がある。音韻の項で脱落として扱ったものである。「思った・思うた」となるところを短かくオモタとする。洗った・洗うた――アロタ、誘った・誘うた――サソタ、笑った・笑うた――ワロタ、食った・食うた――クタ、歌った・歌うた――ウトタ。促音便だけでウ音便にならないものでも、持って来た――モテキタ、取って来い――トテコイとなる。ただし、「酔った・吸った」などはヨタ・スタとはならないようにすべてのものがなるわけではない。略音便は現在の中学生の間にもかなりあるようだ。

サ行イ音便がある。「傘をさして」をサイテとする形である。浮かして――ウカイテ、下ろして――オロイテ、残して――ノコイテ、流シテ――ナガイテ。時にはこのイがエとなり、ナガエテ（流して）となることもあるが、このイ音便は現在の中学生はほとんど使わないようだ。これもまた、サ行五段活用の語のすべてがイ音便になるわけではない。「押す・通す」などは当市ではならない。略音便もこのサ行イ音便も語幹が一音節の語は比較的なりにくいようだ。

なお、「行ってきた」はイッテッタとなる。取ってきた――トッテッタ、やってきた――ヤッタッタ。

「畳む」はタタムでタトムは少ない。「挟む」はハサムのほかにハソムもあり、「染む」は、手の傷に水がシュムとなり、インキはシムとなる。

動作態　「動詞＋ている」の形で「書いている」は書イトル・書ッキョルで、

今、書イトルトコヤ、チョット待ットッテ（今、書いているところだ、少し待っていて）

今、書ッキョルトコヤ……

の両形がある。今回のインフォーマント田中氏によると、書イトルトコヤの方が新しい感じがするとのことであった。

帰ットルは既に家に到着して家に居る、の意。帰ッリョルは、帰りつつある、である。

「今、雪が降りつつある」は、雪、降ットル・降ッリョルであるが、「空は青空で庭に雪が積もっている状態」は、雪、降ットルで降ットラー、出テミー、降ットーとなる。

動詞の俚言

カタカナの俚言形を（　　）の意で用いる。以下の俚言形には単な音韻変化のものもあるが、その音韻変化の形を見てもらいたい。

アオノク（仰向く）、イガム（ゆがむ）、イラウ（さわる）、エズク（嘔吐）、オコル（叱る）、オワエル（追っかける）、カク（持ち上げる）、カタゲル（背負う）、コケル（ころぶ）、コソバカス（くすぐる）、コッサエル（こしらえる）、コラエル（堪忍してやる）、チビル・シビル（漏らす）、チラバカス（散らかす）、ツクバウ（しゃがむ）、ツロックスル（釣合う）、ドヤス・ドツク（殴る）、ナスクル（なすりつける）、ヌケソスル・スッポンカマス（脱走する）、ハットバリスル（両手をひろげて通行を邪魔する）、ヒッシャゲル・ヘッシャゲル（ひしゃげる）、ヘズル（はつる・へぐ）、ヘッチャゲル・ヘチャゲル（つぶれる）、マタゲル（またぐ）、メグ（毀す）、ヤツス（めかす）、ワメク・ドナル（叫ぶ）

形容詞

形容詞活用の特色あるものについて「長い」「無い」を例として示す。

語幹のままで、「ナガ（長）」は、「ああ、ナガ」の形で使われる。

推量はナガカロで、ナガカロガ短カカロガ、ドッチデモエエ（長かろうが、短かかろうが、どちらでもよい）となる。

連用形は、ナゴとナガカリとがある。ナゴナル（長くなる）、ナガカリョッタモンヤ（長かったものだ）。

音便形はナガカッタである。仮定形はナガケリャで、ナガケリャ長イママデエエ（長ければ長いままでよい）。これが、高砂市あたりでは、長ケラの形もあるが、当市ではこれはあまり用いない。

「無い」も同様に、推量はナカロ、連用形はノーナル（無くなる）、ナカリョッタモンヤ（無かったものだ）、仮定形はナケリャである。「長ケラ」と同じように、無ケラは少ない。強調はナーガイではなくナガーイである。

形容詞の俚言

イグイ（えぐい）、オトロシ（恐しい）、オモッソイ（面白い）、カイイ（痒い）、グツワルイ（段取りが悪い）、ケナルイ（羨しい）、ゴツイ・ゴッツイ（たいへん大きい）、ジョーブイ（丈夫な）、ショーモナイ（つまらない）、ジルイ（泥でぬかるみになっているさま）、ダイイ（だるい）、ダンナイ（かまわない）、ナルイ（斜傾がゆるい）、ヤラコイ（軟い）。

形容動詞

形容動詞の問題は「静カダ」「静カジャ」「静カヤ」のいずれを使うかということで、これは指定助動詞のダ・ジャ・ヤと一致する。当地では、ジャが古く、ヤが新しい形として並存する。

キレーヤッタモンヤケドナァ（綺麗だったものだけれどねえ）と、キレージャッタモンジャケドナァとがあり、形容動詞語尾がヤになる人は助動詞もヤになるということである。老人はジャ、若い人はヤである。

助動詞

使役　ス・サス

本稿末の中学生動態に示すように、セル・サセルもあるが、ス・サスの方が多く、当市においてはス・サスの方が一般的である。書カス・書カサヘン・書カシテ・書カセ・書カソーのように五段に活用する。受ケサス・受ケサシテとなる。さらに、一段活用動詞のラ行五段活用化により、受ケラス・受ケラシテミー（受けさせてみよ）、来ラス・来ラシテミーとなり、来サシテミーと並存する。

打消　ン・ヘン

ンは、ズ（連用形）・イ・ナン（音便形）・ン（終止形）・ナ（仮定形）となる。

今日、午前中ナンニモセズジャ。

ナンニモセズニ文句バッカリ言う。

ズジャ・ズヤ、ズニはこの形で慣用的に用いる。

行カイデモエエ（行かなくてもよい）。

行カナンダラヨカッタ。

知ラナ（知らなければ）知ランデモエエ。

打消助動詞としてはヘンが一般的である。動詞語幹の語尾がイ段であるときは同化されてヒンとなる。着ーヒン・見ーヒン・落チーヒンなど。

打消過去　ナンダ・ヘナンダ

ナンダはナンデ（連用形）・ナンダ（終止・連体形）・ナンダラ（仮定形）となる。

ヘナンダはヘンとナンダとがいっしょになったものである。

行カナンダ・行カヘナンダ、知ラナンダ・知ラヘナンダを同じように使う。

指定　ジャ・ヤ

老年層はジャ、若手層はヤである。しかし、別表の相生中学校にあるように、中学生でジャを使う者もある。特に、男子中学生で、乱暴な言い方とか、怒った意に使うとか、ナンジャカンジャ文句バッカリ言ウのように並立的に、また、ある慣用的な語句に限って言う形としてジャがあらわれることがある。

丁寧な指定　ダハン・マハン（稀）

デスがダスとなるのは大阪、ドスとなるのは京都である。当市では女性がソーダシタと丁寧の意をこめて使う。

このダスがS――h交替（無声摩擦音どうし）で、ダッセ→ダッハ→ダハとなり、それをさらに強めてダハンとなる。ソーダハン（そうですよ）。同様に、マス→マッセ→マッハ→マハン。行キマハン（行きますよ）となる。このダハン・マハンは赤穂市に多い形である。相生市にも古くはあったが、最近は少くなったということである。

助詞

ガ……主格の「ガ」は日常会話で状況判断がお互いに容易な場合は省略することが多い。

オ前、傘〇ナインカ。〈〇印は助詞省略を示す。〉

今日、雨〇降リソーヤ。

主述関係を明確に打ち出す場合は省略しない。

雪ガ降ッリョル。窓ガ開イトル。傘ガナインヤ。

オ（を）……「ガ」よりも省くことがさらに多い。

ヨー字（じ）〇見テミイ。酒〇飲ンダリ、歌〇ウトタリ。

ノ・ノン・ン……行クノワイヤヤ（行くのはいやだ）よりも行クンワイヤヤの方が一般的。行クノンワの形は少ない。

ニ……場所を示すニの省略はあまりない。本ニ書イタルトーリ。播州方言としては場所を示すときに「へ」を使う。家ニ帰ル→家エ（へ）帰ル。

ト……トのあとに「言ウ」「思ウ」がつくときは省くことが多い。

田中〇ユー人。行ク〇思タラ。行コ〇思タラ。このトは、「何ト」に限り省くことができないで、何チュー人（何という人）のように融合の形になる。

サカイ……理由をあらわす「だから」の意。ソヤサカイニ（そうだから）はヘヤサカイニ。ソヤセーニともなる。

ワ（は）……軽く言うときには省く。アシタ〇雨ヤ。酒〇飲ムケド、タバコ〇スエヘン。これを強調するときは省かない。

酒ワ飲ムケド、煙草ワスエヘン。

ナト……「なりとも」の意。オ茶ナト飲モカ。ナンナトセエ。

バッカシ……「ばかり」の意。漫画バッカシ読ンドル。

ナラ……「ながら」の意。三人ナラ女ノ子ヤテ。

モッテ……「ながら」の意。食イモッテ歩クナ。飲ミモッテ話ショオ。

ナンド……「など」の意。飯ナンド要ラン。

ガン……「ほど」の意。コノ菓子百円ガン下サイ。「百円分」というような意。

ド……「ぞ」の意。ナンド言ータカ。

ナ……禁止をあらわす。ソンナ事スナ。廊下走ンナ。

ガヤ……文末につけて強意。モーワシガ言ータロガヤ。

ジャ……文末につけて強意。ソレグライ、ワシデモセエジャ（私だってするさ）。

ナラ……文末につけて強意。ドコエ、イクンナラ（どこへ行くのか）。

副詞の俚言

スックリ（すっかり）、ジョージ（常に、いつも）、センクリ（くりかえし、次々と）、デーライ（大げさ・大層）、ドッチミチ・ドッチャミチ（いずれにしろ）、ネッカラ（一向に、生まれつき）、ヘラヘット（たくさん）、ムサンコニ（むやみに）、メッソーデ（目分量で）。

動態調査

相生中学校と赤穂中学校の各一クラスで、本稿末に記す「表」の調査をおこなった。

方言には、同一地点ではすべて同じことばを使っているということを前提とする立場があるが、もう一つ、ことばは絶えず動いているということがある。ことばは常に変化しつつあるというのである。特に若い層ではたえずことばが動いているというのである。

「表」に示す1～43は、標準語形を示し、それに対する方言形の使用をパーセントであらわしたものである。

これについて簡単な説明を記しておく。

13・15などの、いわゆる略音便は、大阪形といわれるものである。「洗った・洗うた」からアロタ、「思った・思うた」からオモタ、「食った・食うた」からクタの形になる。

これが、より大阪寄りの相生中学校の方に多いことは、大阪勢力が次第に西へ西へと進んできていることを示すものである。

これに対して、1～4などの打消のヘン・ンでは、ヘンが大

阪式、ンが岡山式とみられる。

赤穂のすぐ西、岡山県の日生中学校では、書カン・降ラン・着ンがそれぞれいずれも一〇〇パーセントを示している。この形は神戸などではほとんどみられない。これが相生市にあることは、西寄りであることを示すものの一つである。

打消のヒンは、語幹末尾がiになるものにつく、ヘンが順行同化によってなったものである。

16「(傘)さして」は、播磨一帯でサイテ・サエテの形になることが多いが、当地中学生ではみられない。しかし、先の動詞の項に記したように大人には多い形である。若い層でことばがかわった例の一つともいえるであろう。

20(能力)「書くことができない」は、能力不可能というもので、例えば、「この子は幼くてまだ字を書くことができない」の意。

21(状況)は状況不可能で、書く能力はあるが、「手が痛くて書くことができない」の意である。

22・23、赤穂では「赤」も「明」も、両方とも同じ形のアコーナルとなるのが、かなり高い率を示している。

25「長」もナゴーナルが高率。ナガーナルがア段をのばすのに対して、22・23・25に共通してオ段をのばした形になる。これは相生市と赤穂市との違いを示すものの一つである。

32の仮定形、(来)クリャは赤穂市に多い。相生市では大人に、取リャ・寝リャの形が多い。大人に多く中学生に少ないことは、この形が古いということがいえる。

35の敬語形は「先生が字を――――」として示したのであるが、最近の中学生はあまり敬語を使わないので困っていたようである。それで「つつある」の現在進行態で答えたものがある。

41、関東は「借リル・借リタ」、関西は「借ル・借ッタ」ということであったが、相生市の中学生に関東式が入ってきていることを示すものである。

44は、カタカナの部分を(　　)内の意で、このことばを「使う」「使わないがよく聞く」「聞かない(使わない)」のいずれかを示すものである。

①ねじがアホーになっている(効かなくなる)。②そんなアホクサイことできるものか(馬鹿馬鹿しいこと)。③この計算はジャマクサイ(面倒くさい)。④あの人はシンキクサイ人だ(思うようにならず気がいらいらする)。⑤そんなことアホラシューモナイ(ばからしいの強調)。⑥いつもセワシナイ人だ(気ぜわしい、忙しい)。⑦明日も来てくれてもダンナイ(さしつかえない、かまわない)。⑧ちょっところんだけれどベッ

チョナイ（異常ない）。⑨お礼を言われるなんてメッソモナイ（とんでもない、いえいえどういたしまして）。⑩あの人はエゲツナイ人だ（ひどい）。⑪走ってきたのでシンドイ（疲れる、困る）。⑫話がヤヤコシイ（こみいった、面倒だ）。⑬今日はヌクイ（暖かい）。⑭文句を言ってゴテル（ごたつく、ごたごたする）。⑮石につまづいてコケル（倒れる、ころぶ）。

これらは大阪弁といわれているものであるが、その浸透度を示すものである。

最後に、指定助動詞　ダ・ジャ・ヤのいずれを使うかをソーダ・ソージャ・ソーヤで調査した結果、両校とも女子の方がヤを使う率が多い。相生市でヤが新しく、ジャが古いといわれている。大人にはジャを使う人もかなり多いようだ。一般に若い女性が新しい語形を早くとり入れるということがあるから、相生市もやがてヤ一色になることであろう。

四　語　彙

相生市の語彙を、動物類、植物類、道具・生活類、日時・天気類、状態・数量類、人体・動作類についてしるす。動物、植物、道具・生活の類については、相生市の語形と、〈　〉内に県下の状況をしるした。この県下の状況は先にもしるしたように甲南女子大学生と私とで調査したものである。相生市語形の中、（那）は相生市那波、（相）は相生市相生の意である。特にそれを示さなかったものは共通である。ここでいう那波方言とは、那波在住の田中脩治、相生方言とは相生在住の木下充造・金谷重広の各氏によるものの意である。しかし、実際にはそれほどはっきりと区別されず共通することもあろうと思われる。日時・天気、人体・動作の類以下は、すべて那波方言についてのみしるした。ここの〈　〉内には県内のどこかは記さなかったが県下一般に多い形を記した。――線はアクセントで、―線部分を高く発音する。当市の語だけにアクセントをつける。

動物類

青大将――ネズミトリ〈佐用・赤穂郡・龍野・ネズミトリ・オナグソ〉

蛇――クチナワ・クツナ（那）・クチナ（相）〈赤穂市・クチナ、佐用郡・クチナワ〉

まむし――ハメ〈赤穂市・クッチャメ、淡路・ハメ〉

とかげ――トカゲ〈加東郡・ヘビノオバサン・オンバ、明石・ゾーキリ、淡路トカギ〉

蛙――カエル・ガエル（那）・ギャール（相）〈赤穂郡上郡・カ

ワズ、淡路・ガエル〉

殿様蛙――アオガエル・トノサマガエル（那）・トノサマガエル（相）〈宍粟郡・ドンビキ、粟父郡・ドンビキギャール〉

ひきがえる――オンビキ（那）・オンビキ・ドンビキ（相）〈播磨・オンビキ〉

おたまじゃくし――オタマジャクシ〈北播磨・ヘヘル・ヘラヘラ・タナゴ、宍粟郡・ガールゴ〉

蝸牛――デンデンムシ〈県下広く・デンデンムシ、北近畿・ツムリ、南近畿・マイマイ〉

こおろぎ――コーロギ〈城崎・粟父郡・ケラ・オケラ、英方郡・クロト、加東郡・イトジ〉

こがね虫――ブンブン・ブイブイ（那）・カネムシ（相）〈佐用・赤穂郡・カネムシ・カネキリムシ、東播磨・ブイブイ〉

さなぎ――サナギ〈宍粟・佐用郡・ビービー〉

赤とんぼ――アカトンボ（那）・シューロ（相）〈赤穂郡・ショーロトンボ〉

とんぼ――トンボ〈明石・ドンボー〉

蜘蛛――クモ〈宍粟郡・クボ・ウボ〉

女郎ぐも――ジョローグモ〈佐用郡・ヘイタイグモ、粟父郡・トチグモ〉

くもの糸――クモノス・クモノイト〈宍粟郡・クモノイギ、多可郡・クモノイ〉

あめんぼ――ミズスマシ（相）〈多可郡・アメリカ〉

水すまし――マイマイ（那）・マイマイコンコン（相）〈多可郡・マイマイコ、マイマイコンコン〉

いもり――イモリ〈宍粟郡・イモラ〉

かまきり――カミキリ〈播磨・カミキリムシ・モットイムシ、宍粟郡・オガメ・オガメムシ、淡路・ホトケウマ〉

ふくろう――フクロ・フクロー〈加東郡・フクロドリ・ネコドリ、播磨・ホーホードリ・ホードリ〉

きつつき――キツツキ〈宍粟郡・キタタキ〉

なめくじ――ナメクジ・ナメクジラ〈宍粟郡・ナメクジリ〉

とさか――トサカ・トカサ〈宍粟郡・トッサコ、淡路・トッサカ〉

うろこ――ウロコ〈英方郡・サメ・サミ〉

牡牛――コットイ〈県下広く・コットイ、但馬・コテー〉

牝牛――オナベ〈県下広く・オナメ、但馬・オンナメ〉

子牛――ベコ〈県下広く・ベコ、但馬・コージ、淡路・ベベンコ〉

めだか――メトト〈粟父郡・ハリンゴ・ハリンギョ、佐用郡・メトハリ・メトバリ・メトバエ・メットンバイ（小さい魚の総称としてミミンジャコ）〉

もぐら――ムグラモチ〈佐用郡・ムクロモチ〉

植物類

あけび――アキビ（那）・アケビ（相）〈宍粟郡・アケボボ、佐用郡・ネコノヘド・ネコノクソ〉

いたどり――スココン・ダンジ（那）・イタドリ（相）〈播磨・ダンジ、宍粟郡・スカンポ、明石・アシナ、高砂・スイスイ〉

きのこ――タケ〈県下ひろく・タケ〉

すみれ――スミレ〈多可郡・スモートリグサ、播磨・スモートリバナ〉

たんぽぽ――タンポポ〈加古郡・シイビビ、明石・タンポコ〉

まんじゅしゃげ――シブラ（那）・ソーレンバナ・キツネバナ（相）〈播磨東南・テクサリ、佐用・赤穂郡・シビレ〉

つくし――ホーシコ（那）・ツクシンボ（相）〈播磨東南・ツクツクボーシ〉

つゆくさ――ギスグサ（那）・ツユクサ（相）〈美方郡・トンボグサ、播磨・ギスグサ、佐用郡・ハナガラ、県南部・カマグサ〉

どくだみ――ドッカメ（那）・ドッカミ（相）〈佐用・赤穂郡・ドクハメ、播磨南部・ジューヤク〉

はこべ――ヒヨコグサ〈宍粟郡・ヒズリ・ヘズリ〉

春ぐみ――グビ〈県下ひろく・グミ、美方・養父郡・ナワシログミ、養父・宍粟郡・ヤマグミ、西播磨・グンビ〉

山ぶどう――エベッロ〈宍粟・佐用郡・エビ・エビナンゴ〉

まつかさ――マツカサ〈播磨西部・フグリ・ホーグリ、県東南・チンチロ〉

もみがら――スクモ〈県東南・スリヌカ、丹波・サラヌカ、北摂津・アラヌカ、播磨西部・スクモ〉

とうもろこし――ナンバキビ〈播磨西部・タカラキビ・トーキビ〉

かぼちゃ――ナンキン（那）・カボチャ（相）〈淡路・トーナス〉

甘藷――サツマイモ〈神崎郡・カライモ、淡路南・リューキューイモ〉

馬鈴薯――ジャガイモ〈佐用郡・キンカイモ〉

里芋――コイモ〈宍粟・佐用郡・タイモ、県西部・エグイモ〉

落葉――コクバ（那）・カレバ（相）〈多可郡・スイバ、神崎郡・バンバ〉

落松葉――コクバ〈美方郡・アカバ、小野・シバ〉

木の切り株――キリカブ（那）、カブ（相）〈宍粟郡・ホタ、出石郡・カブテン、県東南・カブテン〉

とげ（指にささる木や竹の細片）――ソゲ（那）・トゲ（相）〈県南部・クイ、美方郡・ハリ・クイ〉

とげ（バラなどの茎にある）――グイ（那）・トゲ（相）〈県南部・ハリ、淡路北・イバラ・イボイボ、明石・ツコツコ、姫路・ケン〉

道具・生活類

井戸――ユツ（那）・イド（相）〈佐用郡・ユツ、出石郡・ホリヌキ・ウチコミ、赤穂市・ホリヌキ〉

稲架――ハゼ（那）・ハデ（相）〈県東南・イナキ、宍粟・佐用・赤穂郡・ハゼ〉

かかし（案山子）――カガシ〈出石郡・ニンギョーノオドシ、赤穂郡・ニンゲンノオドシ、淡路北・スズメノオドシ〉

お手玉――トンキ（那）・イイチコ（相）〈養父・朝来郡・イシナゴ、宍粟・佐用・赤穂郡・オシト、県西部・オサラ〉

おはじき――オハジキ・ハジキ〈美方郡・ハジキコ、養父郡・オオサラ、氷上・多紀郡・ベンチャラ、多可郡・ケッチンコ〉

片足とび――イッケンケン（那）・ケンケン（相）〈佐用郡・ケンパ・イッケン、美方郡・チンガチンガ・チンガトンガ〉

肩車――カタクマ（那）・カタグルマ（相）〈県西南・テングルマ、宝塚・伊丹市・チチクマ、美方郡・テングルマ・ダイブツ〉

竹馬――タケンマ（那）・タケウマ（相）〈播磨・淡路・タケンマ、宍粟郡・タカシ・タカアシ、赤穂郡・サンヤシ〉

凧――タコ〈淡路北・イカノボリ・ノボリ、淡路南・ヨカンベ、県下広く・タコ・イカ〉

めんこ（子供の遊び道具）――ケン・バッチン〈県東南・ベッタン、播磨北・ベッタン、多可・加東郡・カエシ、美方郡・ゲンジ、宍粟郡・パン〉

涼台――スズミダイ・ショーギ（那）・ショーギダイ（相）〈佐用郡・エンダイ、多可郡・ベンゲ〉

すりこぎ――レンゲ（那）・レンギ（相）〈淡路・レーギ〉

洗濯――センダク（那）・センタク（相）〈近畿一般・センダク、竜野市・淡路・センタク〉

田植休み――サナボリ（雨のための休みはノヤスミ）〈県下広く・サナボリ、美方・養父郡・シロミテ〉

おひつ――オヒツ〈佐用郡・ハンボ、県下広く・オヒツとハンボを別物とする〉

小皿――テショーザラ〈播磨・テシオ〉

たわし――タワシ〈尼崎市・ササラ、宍粟郡・アライソーリ、赤穂市・サワダシ、県南部・キリワラ〉

まないた（俎板）――マナイタ〈但馬・キリバン、出石町・ナキリ、美方郡・ナマイタ、姫路市・ナマクサイタ、淡路・ウオマナイタ〉

天秤棒――オーコ（那）・ニナイボー（相）〈県下広く・ニナイボー、養父郡・ザルボー〉

陶磁器——セトモン・カラツモン（那）・セトモン（相）（相生市は東の瀬戸市と西の唐津市の中間にあり、昔、市内の店の看板にセトモノ店・カラツモノ店の両方があった）〈県南部・セトモノ、宍粟郡・カラツモノ〉

流し台——ハシリ（那）・アライバ（相）〈県南部・ハシリ、出石郡・ナガシ、姫路・ハシリモト〉

襖——カラカミ（那）・フスマ・カラカミ（相）（一般にはフスマで、床の間のある部屋はカラカミ）〈近畿一般・フスマ、佐用郡・カラカミ〉

へそくり——ヘソクリ〈明石・赤穂市・ナイショガネ、宍粟郡・マツボリ〉

湯気——ホケ（那）・ユゲ（相）〈県下広く・ユゲ、出石郡・イゲ、宍粟郡・ホケ〉

日時・天気類

大晦日——オーツゴモリ〈ツゴモリ〉　一日おき——イチニチハダメ〈イチニチハザメ〉　昨日——キンニョー〈キニョー〉　一昨日——オトトイ〈オトトイ・オトツイ〉　明々後日——シアサッテ〈シアサッテ・シラサッテ〉　昨晩——ヨンベ・キノーノヨサ〈キンノヨサ〉　一昨晩——オトトイノバン・オトトイノヨンベ〈オトツイノバン〉　太陽——オヒーサン〈オヒーサン〉　月——オツキサン〈マンマンサン〉　虹——ニジ〈ニンジ・ビョージ〉　夕立——ヨダチ〈シマケ〉　稲妻——ヨダチ〈ヒカヒカ〉　雷——ヨダチ〈ゴーゴーサン〉　（雷が）落ちる——オチル〈アマル〉　つらら——ツララ〈ツズラ〉　凍る——イテル〈イテル〉

状態・数量類

明るい——アカイ〈アカルイ・アカイ〉　大きい——ゴツイ・ゴッツイ〈ゴッツイ〉　小さい——コマイ〈コマイ・チッチャイ〉　細かい——コマイ〈コマイ・コマカイ〉　みずくさい——ミズクサイ〈アマイ・ウスイ〉　きな臭い——コゲクサイ〈キナクサイ・カンコクサイ〉　まぶしい——マバイイ〈マバイイ〉　恐しい——オトロシイ〈コワイ・オトロシイ〉　くすぐったい——コソバイイ〈クツバイ〉　良い——エエ〈エエ〉　いくつ（物の数）——ナンボ〈イクツ〉　いくら（値段）——ナンボ〈イクラ〉　沢山——ギョーサン・ヨーケ〈ヨーケ〉　未だ——マダ〈マダ・マンダ〉　うらやましい——ケナルイ〈ケナリイ〉

人体・動作類

旋毛——ツムジ・ギリギリ〈ツムジ・ギリ〉　ものもらい——メバチコ〈メイボ〉　まゆ毛——マヒゲ〈マヒゲ〉　つば——ツワ〈ツバ・ツワ〉　霜焼——シモヤケ〈シモバレ〉　くすぐる——コソバカス〈コソバカス〉　捨てる——ホカス・シテル〈ホカス・

シテル〉　貸す――カス〈カス・カセル〉　借る――カル〈カル・カリル〉　いびきをかく――イビキカク〈ゴロタヒク〉　（咳を）する――タグル〈タグル〉　（うそを）つく――タレル〈タレル〉　（匂いを）かぐ――カグ〈カグ・カゾム〉　痣になる――シヌ〈シヌ〉　叫ぶ――ワメク〈オガル〉

その他、相生方言（相生市相生）としての特徴のある語をしるす。

漁夫――リョーシ・ウタセ　東南風――ヤマジ　西南風――マジ　東北風――コチ　よく働く人――シゴトシー　怠け者――ナマケモン・ノータリン　けちんぼう――ケチンボー・ニギリ　末っ子――オトンベ　返礼の品――オタメ　さしつかえない――ダンナイ・セワナイ・ラクジャ　動く――イゴク・イノク　にわか雨――ソバエ　日照り雨――キツネノヨメイリ　てんびん棒――オコ　いなむら――ワラグロ　高下駄――サシゲタ

那波方言（相生市那波）として特徴のある語をしるす。

旋毛――ボンノクボ（老）　額――デボチン　頬――ポッペタ　顎――オトガイ　膝頭――スネボンサン　かがと――キビス　マッチ――スリビ　金持ち――シンショニン　乳母――オンバ　半日――ヒナカ　石油――セキタン（石油を入れた箱をセキタンバコという。石炭はゴヘータンと言い、かますに入れる）

五　文　献

方言はその時代その時代の土地の生活語であるから、その時点での生活語を正確に詳細に記しておくことが大切である。労市の過去の資料として以下のものがある。

『播州小河の方言』高田十郎著。半紙二つ折判。ガリ版。三冊八〇ページ。昭和五年・六年刊。見出し語、一四一四語。記述の方針として「総則」「凡例」に次のように記してある。

明治二十年代前后ノ小河ノ方言ヲ記述スル。ソレニハ単ニ他ト異ッタト思ハレル語ヲ挙ゲルバカリデナク、凡ソ其頃ニ、小河デ行ハレタ言語全部ヲ列記シ、解説ヲ要セヌ者ハ其儘トシ、其必要ノアル者ダケニ解説ヲ施シ、特ニ小河人トシテノ郷土生活ニ関係ノアル事柄ガアレバナルベク、ソレモ附記スルヤウニシテ方言集ヲトホシテ当時ノ小河人ノ生活ノ概要ガ分ルヤウニ企テテ見ル考ヘデアル。記述ノ順序ハ若干ノ項目ヲ立テ、各々ノ項目ニ属スル言葉ヲ適宜標準ニヨッテ配列スル。

この項目として、身体・身体の動作・身体装飾・身体自然の変

化・親族・公事関係者・農業・工業・商業……などに分けて記している。

ここにその一四〇〇語すべてをあげる余裕がないので特徴ある語について記す。片仮名書きが本書の見出し語。（　）内はその意味。見出し語の上の○は、今回那波方言調査の協力者田中俤治も使うといわれた語。〔　〕内は今回の調査者鎌田の解説。A→Bは共通語のAが音韻交替によってBに変ったことを示す。例、マスゲ（睫毛）matuge→masuge〔t→s〕〃　〃は協力者田中の説明。

○マスゲ（睫毛）〔t→s〕○ツワ（唾）〔b→w〕○ハジシ（歯肉）〔歯茎・古くは肉をシシと言う〕○ノゾ（喉）〔d→z〕○アゲト（顎）〔〝アガトともいった〕○テエ（手）〔一拍語を二拍にのばすことは近畿方言の特徴〕ベンサシユビ（薬指）〔〝ベニサシユビという〕○ハナピコピコサスル（鼻をびこびこさせる）〔サセル→サスルか、サスとサセルの混交か〕○クチクタグ（口を塞ぐ）〔s→t〕○ホバル（頬張る）〔ホホの同音脱落〕○歯カミヤワスル（歯をかみ合せる）〔ia連母音の間に半母音jが入りヤとなる。見合・試合もミヤイ・シヤイとなる〕○ハギリカム（歯ぎしりをする）○ペチャペチャユワスル（口をぺちゃぺちゃゆわせる）〔〝ユワスルともいうが最近はユワセルの方が多い〕セキハライスル（〝最近はセキバライ〕○オーケナコエスル（大きな声をだす）〔大きな i→e〕○ウシャウシャバナシ（ひそひそ話）〔〝最近はコソコソ話〕○ヒコズル（引きずる）〔i→o〕○ヘサエル（おさえる）○サバル（しっかりと手をかけてぶら下がる）○プチャス（きつく叩く・殴る）○クラガス（叩く）○サシャゲル（差上る）〔〝上にあげる〕サザカス（物を高い所へ差上げて届ける）○ホリャゲル（ほり上げる）〔ria→rja〕○フミメグ（踏みくだく）〔メグは毀す〝フンメグという〕○ケッパナヅク（つまづく）〔〝ケッパリズクともいう〕○ヘザマヅク（ひざまづく）〔i→e〕○ヒラマタカク（跌坐）ヘリマタカク（跌坐）アトザカリスル（あとずさりする）イッペンコンコスル（片足でひょいひょいとんで進む）〔〝イッケンチンスルという〕○イネブリスル（居眠りする）〔m→b は、ほかにもサムイ→サブイ、ケムリ→ケブリもある〕○ゴロタヒク（いびきをかく）○オキャガル（起上る）〔kia→kja〕○タタキヤイスル（叩き合い）〔ia連母音にjが入る〕〝タタッキャイともなる〕○ドツキヤイ（叩き合い）○ツカミヤイ（つかみ合い）○ケンクワスル（クワが弱くクワとカとの間）○ミミニハサケル（耳にはさむ）〔乱れる・はずれ

る・つぶれる・ねじれる―ミダケル・ハズケル・ツブケル・ネジケルは県下にひろい）○ハナホゼル（鼻をほじる）（i→e）○ホーベン（頬紅）（niのiの脱落）○ツレヤイ（配偶者）（ea連母音の間にjが入る）○ワカイシ（若い衆）（長音を短音化）チューロン（中老衆）（ンの添加）○ゲンサイ（意中の女）○カンノッサン（神主様）シクワンサン（祠官様）イットーメサン（祠官様・祠官は四貫、四貫は一斗目に相当）○クワンインサン（官員様）（〝カに近い〟）○ケーサツ（警察）（ei→ee）○チンダイ（鎮台―兵隊・軍人）○スモントリ（相撲取り）○ジョロリカタリ（浄瑠璃語り）○ノシト（盗人）（u→o）○ノソ（鈍音）（〝ノソタともいう〟）○ネンシャ（物に念を入れる人）○セチベンヤ（余裕のない杓子定規の人）○コージクモン（綿密な人）

「相生の方言」　これは『相生町信用販売購買利用組合創立二十五周年記念誌』（昭二四）で大西五十一の記。二ページに四四語。「方言」「字源」「解説」があるが、ここに一部を省略して「方言」と「解説」を記す。

オトー・父。オカー・母。ワレ・君、同僚に用ゆ。ウラ・自分のこと。オンシ・お前さん。アンニャ・兄（アニヤハン）とも言ふ。ネーヤン・姉。ギョーサン・沢山。ジョーサン・沢山。チバケル・ざれること。ジョージ・平常（文章的）。ソーカ・パンパン。ソーケ・ざる。ゴツイ・ひどい又は大きい。ドカイ・如何。ガイヨー・具合良く。アンジョイ・具合良く。アンバイヨー・具合良く。チョー・驚く場合（オッチョッチョー）。ド・強調して悪く言ふ時用ゆ。ドエライ・体大。ドシャブリ・強雨。ドツク・叩く。チョウシモン・あわて者、オッチョコチョイ。チョーサイボ・おだてなぐさみ、さいなむ。ワヤ・無茶苦茶。ゴジャ・無茶苦茶。エイ・良い。エイガイ・良いわいと人に言ふ場合。コンネイ・此の家、現在の家。コンノカタ・此の家の人。シンドイ・くたぶれ。ヘシマゲル・折り曲げる。ソガイ・そんな事（ソガイナコト）。チビット・少し。カイ・皆、カイだまれ、カイちょこざいな。ヘッサ・久し。ダンナイ・かまわぬ、良い。カバチ・カバチツクナ（ヨケイナ口出スナ）。ケン・言葉の下につける（ソーケン）。ソーヤサカイニ・そーであるから。ホンダイマ・そうだから。ナンカスノヤ・なんだ何を言ふのか。

ほかに、相生小学校文芸部による『よいことばをつかいましょう』（年月不明）がある。半紙一枚活字。「じぶんをさすことば・あいてをさすことば・あいてのよびかた・へんじのことば・人をばかにしたことば・あいさつのことば・つぎのことば

はできるだけつかわないでよいことばをつかうようにしましょう」の項に「よいことば」と方言形とを記している。さらに「わるいことば」の項で五十音順に方言形のみ一三八語を記す。

昭和二十五、六年頃から三十年頃に市内各小学校でこのような印刷物が出たようだ。「相生の方言」と、相生小学校のものは都染直也氏の資料を借用した。

本稿を成すにあたって『龍野市史第七巻――方言（和田実）』、『藤井寺市史紀要第六集――藤井寺市の方言（西宮一民）』の項目を参考にした。

本稿は『相生市史　第七巻』の「方言」の項を執筆するために昭和六十一年秋から六十二年はじめに調査したものであり、同書の方言の項と重なる部分が多いことをお断りする。

(裏)

語形	相生中		赤穂中	
	男	女	男	女
7 勉強しない	%	%	%	%
セーヘン	88	100	90	85
セン	12	0	5	5
シーヒン	0	0	0	5
シナイ	0	0	5	5
8 痛くない				
イタナイ	40	47	0	17
イターナイ	33	20	0	0
イタアラヘン	0	6	0	0
イトナイ	0	0	20	5
イトーナイ	0	0	13	28
イトーネエ	0	0	30	0
イタクナイ	27	27	37	50
9 書こう				
カカー	14	0	0	0
カコー	43	87	82	84
カコ	43	13	18	16
10 起きよう				
オキヨー	95	100	95	100
オキヨ	5	0	5	0
11 受けよう				
ウケヨー	95	100	95	100
ウケヨ	5	0	5	0
12 会った				
オータ	90	95	80	85
アッタ	10	5	20	15
13 洗った				
アロタ	80	93	47	64
アロータ	0	0	29	27
アラッタ	20	7	24	9
14 買った				
コータ	90	76	85	85
カッタ	10	24	15	15

語形	相生中		赤穂中	
	男	女	男	女
1 書かない	%	%	%	%
カカヘン	83	88	84	70
カケヘン	0	6	0	24
カカン	17	6	16	6
2 降らない				
フラヘン	83	86	77	89
フレヘン	0	7	17	0
フラン	17	7	6	11
3 着ない				
キーヘン	35	20	58	68
キーヒン	50	66	30	22
キヤヘン	0	7	0	0
キラヘン	5	0	0	5
キン	5	0	12	0
キナイ	5	7	0	5
4 起きない				
オキヘン	25	14	52	48
オキヒン	55	72	38	52
オキン	20	14	10	0
5 寝ない				
ネーヘン	95	95	90	95
ネラヘン	0	5	5	0
ネン	5	0	0	0
ネナイ	0	0	5	5
6 来ない				
コーヘン	94	94	75	85
コン	6	0	10	0
コエヘン	0	0	5	0
キヤヘン	0	6	0	0
キーヘン	0	0	0	5
キーヒン	0	0	0	5
ケーヘン	0	0	0	5
コナイ	0	0	10	0

語形	相生中		赤穂中	
	男	女	男	女
21 (状況)書くことができない	%	%	%	%
カケヘン	88	88	68	77
カケーヘン	0	6	11	23
カケン	6	0	5	0
カケレヘン	0	0	11	0
カケラレヘン	0	6	0	0
カケナイ	6	0	5	0
22 赤くなる				
アカナル	31	37	5	4
アカーナル	50	50	17	18
アコナル	0	13	11	13
アコーナル	6	0	62	60
アカクナル	13	0	5	5
23 明るくなる				
アカルナル	23	41	0	13
アカルーナル	47	53	48	34
アカナル	0	6	5	9
アカーナル	5	0	0	0
アコーナル	5	0	30	31
アカルクナル	20	0	17	13
24 良くなる				
ヨーナル	70	93	56	85
エーナル	5	7	17	5
ヨクナル	25	0	27	10
25 長くなる				
ナガナル	20	45	0	5
ナガーナル	40	45	32	18
ナゴナル	30	0	10	18
ナゴーナル	5	10	58	59
ナガクナル	5	0	0	0
26 楽しくなる				
タノシナル	30	25	5	15
タノシーナル	50	75	66	70
タノシクナル	20	0	29	15

語形	相生中		赤穂中	
	男	女	男	女
15 思った	%	%	%	%
オモータ	12	0	24	14
オモタ	63	88	41	72
オモッタ	25	12	35	14
16 傘をさして				
サシテ	100	100	100	100
17 できない				
デキヘン	14	29	40	48
デキヒン	52	47	40	44
デキン	5	5	10	0
デケヘン	29	19	10	4
デキナイ	0	0	0	4
18 起きることができない				
オキラレヘン	24	56	33	46
オキラレン	5	5	12	4
オキレン	19	5	0	0
オキレヘン	33	34	50	50
オキレヘーン	19	0	0	0
オキラレナイ	0	0	5	0
19 来ることができない				
コレヘン	90	95	90	75
コレーヘン	5	0	5	20
コラレヘン	0	5	0	0
コレナイ	5	0	5	5
20 (能力)書くことがでなきない				
ヨーカカン	74	80	65	65
ヨーカカヘン	0	20	24	24
ヨーカケヘン	0	0	0	11
カケヘン	13	0	0	0
カケナイ	13	0	11	0

語形	相生中		赤穂中	
	男	女	男	女
33 起きろ	%	%	%	%
オキ	0	0	12	10
オキー	70	70	60	65
オキーヤ	5	0	0	0
オキヨ	10	25	17	10
オキンカイ	10	0	0	0
オキロ	5	5	11	15
34 お書きになる				
カカハル	0	0	13	5
カキハル	5	0	27	5
カキナサル	45	5	13	10
カカレル	10	0	0	0
カキヨー	0	0	0	5
カッキョー	5	0	21	47
カイテル	0	0	0	5
オカキニナル	5	65	26	23
カク	30	30	0	0
35 行かなかった				
イカナンダ	0	13	10	15
イカヘンカッタ	75	69	60	75
イカンカッタ	20	18	15	5
イカナカッタ	0	0	15	5
イカズヤ	5	0	0	0
36 行かなければ				
イカナ	0	0	0	13
イカナンダラ	5	0	0	13
イカヘンカッタラ	40	56	42	56
イカント	5	0	11	0
イカンカッタラ	30	38	41	18
イケヘンヤッタラ	0	0	6	0
イカンデ	20	6	0	0

語形	相生中		赤穂中	
	男	女	男	女
27 無くなる	%	%	%	%
ナーナル	0	5	6	5
ナイナル	5	30	18	10
ノーナル	20	5	18	30
ネーナル	0	0	6	0
ナクナル	75	60	52	55
28 書かせる				
カカス	63	56	65	55
カカサス	5	0	7	0
カカサセル	0	0	11	10
カカセル	32	44	17	35
29 焼させる				
キサス	56	44	29	54
キセル	33	19	44	13
キラス	0	6	5	13
キサセル	11	31	22	20
30 寝させる				
ネサス	61	75	60	63
ネラス	16	0	25	13
ネラセル	6	0	10	18
ネカス	6	5	0	6
ネカセル	0	0	5	0
ネサセル	11	20	0	0
31 書けば				
カイタラ	85	50	60	80
カキャー	0	12	17	0
カクト	0	0	6	0
カケバ	15	38	17	20
32 来れば				
キタラ	90	80	65	74
クリャ	0	7	20	0
クルト	0	0	5	0
クレバ	10	13	10	26

語形	相生中		赤穂中	
	男	女	男	女
44 ①アホーになる	%	%	%	%
使う	0	15	6	6
聞く	35	70	18	30
聞かない	65	15	76	64
②アホクサイ				
使う	19	73	40	40
聞く	62	27	50	43
聞かない	19	0	10	17
③ジャマクサイ				
使う	81	100	87	83
聞く	19	0	13	17
聞かない	0	0	0	0
④シンキクサイ				
使う	6	6	13	11
聞く	38	47	50	54
聞かない	56	47	47	35
⑤アホラシューモナイ				
使う	0	20	6	0
聞く	12	27	6	30
聞かない	88	53	88	70
⑥セワシナイ				
使う	6	7	37	30
聞く	19	86	50	52
聞かない	75	7	13	18
⑦ダンナイ				
使う	0	0	12	0
聞く	15	7	0	5
聞かない	85	93	88	95
⑧ベッチョナイ				
使う	19	7	43	17
聞く	43	60	39	53
聞かない	38	33	18	30

語形	相生中		赤穂中	
	男	女	男	女
37 行きたくなる	%	%	%	%
イキトナル	5	0	0	10
イキトーナル	10	25	70	80
イキターナル	50	75	12	5
イキタクナル	35	0	18	5
38 行くから				
イクカラ	100	100	83	72
イクサカイ	0	0	5	0
イクデ	0	0	12	28
39 行くか？				
イクカ	90	70	88	85
イクケ	5	20	0	0
イクコ	0	0	0	5
イク	5	10	12	10
40 行かねばならない				
イカナアカン	88	100	36	54
イカナアカヘン	0	0	12	12
イカヘンカッタラアカン	0	0	12	0
イカントアカン	0	0	0	12
イカナナラン	0	0	5	0
イカンナラン	0	0	0	5
イカネバナラナイ	12	0	35	17
41 借りて				
カリテ	85	95	88	100
カッテ	15	5	12	0
42 降るから				
フルカラ	85	95	90	95
フルデ	10	5	5	5
フルサカイ	5	0	5	0
43 入れ物ごと				
ゴト	100	90	100	100
ナリ	0	5	0	0
トモ	0	5	0	0

語形	相生中		赤穂中	
	男	女	男	女
⑨メッソモナイ	%	%	%	%
使う	6	20	6	23
聞く	81	53	57	42
聞かない	13	27	37	35
⑩エゲツナイ				
使う	38	47	44	47
聞く	50	53	38	53
聞かない	22	0	18	0
⑪シンドイ				
使う	88	100	100	90
聞く	12	0	0	10
聞かない	0	0	0	0
⑫ヤヤコシイ				
使う	88	7	94	94
聞く	12	93	6	6
聞かない	0	0	0	0
⑬ヌクイ				
使う	81	100	82	88
聞く	19	0	18	6
聞かない	0	0	0	6
⑭ゴテル				
使う	12	27	0	6
聞く	25	53	18	30
聞かない	63	20	82	64
⑮コケル				
使う	88	100	94	94
聞く	6	0	6	6
聞かない	6	0	0	0
ソーダ	6	0	6	0
ソージャ	18	12	26	6
ソーヤ	76	88	68	94